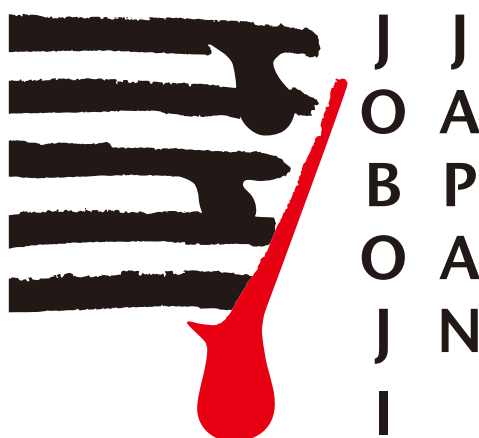




漆の木の幹に「カンナ」を使い一文字に傷を付ける。その傷を癒そうとして自ら出す樹液の一滴一滴を「タカッポ」めがけ「ヘラ」で素早く掻き採る漆掻き職人。まさに漆の原点であるこの「掻き傷」と「樹液」をマークのモチーフとした。漢字4文字の「浄法寺漆」。「浄」、「法」、「漆」、この3文字に共通する部首・偏は、サンズイ（水部）で、意符として液体に関することを示している。このサンズイと掻き傷を一体化させる表現で、漆の生産現場を知らない人にも印象づける。

シンボルマーク 2009年 株式会社浄法寺漆産業（盛岡市）<http://japanjoboji.com>



武藤 正彦 Muto Masahiko

グラフィックデザイナーとして、印刷デザイン、販促プロモーション、金融機関のPR、CIS・VISデザイン、展示グラフィック、市町村合併の市章制定支援業務、ブランド・商品開発などを35年にわたり手がける。特に生漆生産量日本一の浄法寺漆の認証制度委員を務めてから、様々な工芸に興味を深める。国民文化祭あきた・2014「美術展」を担当したことで、工芸家協会に知遇を得て入会した。工芸におけるデザインとは何かを考えて取り組んでいきたい。

1953年男鹿市生。1976年和光大学芸術学部卒業。秋田市、盛岡市のデザイン会社に勤務。秋田県教育庁、秋田市国民文化祭推進室、新屋ガラス工房を経て現在に至る。